

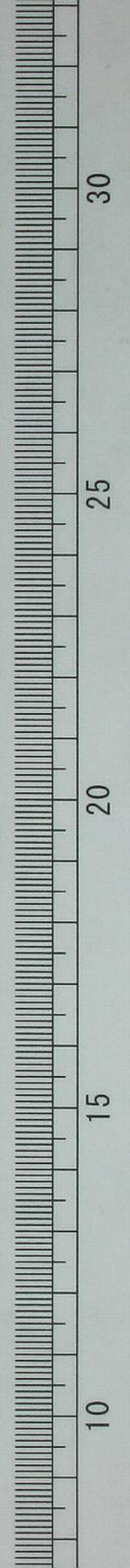
福澤諭吉寓言

かぶ娘

明治五年
壬申九月

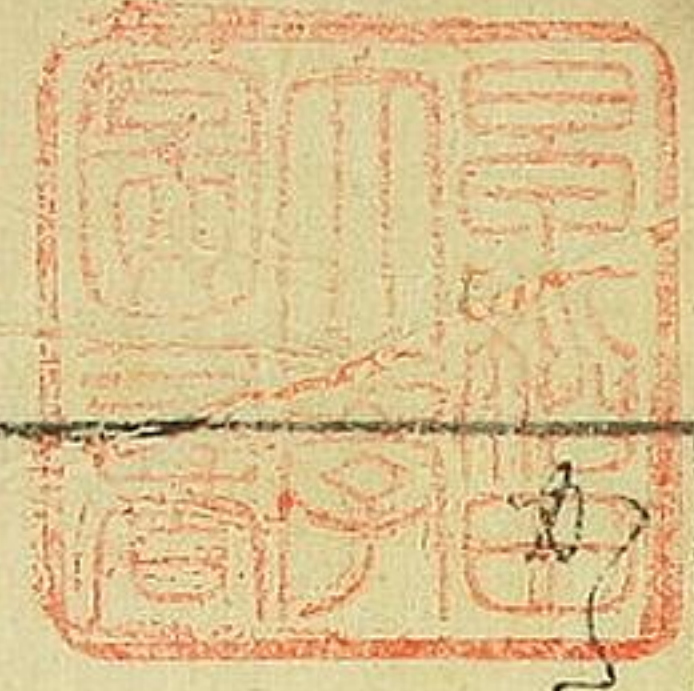


柳田文庫
文庫11
A1460



文庫11
A1460

あさむすめ



福澤諭吉 寓言



或る富家ふけの女子こ誕生たぎしわたりとち申まう分ぶんふく玉たま
 の如ごとき子こふきども生うまひつま眉まゆ毛げふし初はつ生ぶのこ
 となきバかく奪うつ人の目めふもつらどおひく月つき
 日ひをおうをちや八九はち月つきもたち前まへ齒は一二いち枚まいづ
 ちくちくふその色いろ黒くろし尚なほ又また半はん年ねんを過すぎ一いち年ねんを
 暮くれを内うちに上う下げの齒はもちく揃そろひしふいづきも墨すみ

あてぬうたるやうなまども近鬼世間の人ハ尚
これふくろづらむたよく目ふとまるとは
るも珍一かむぬむしむふもろく人ふどして噂
まるとのもろく唯兩親ハくくよりこま成患
ひ世ふ不具あるものも多き中ふ眉毛のあはれも
のろてハ古來人の話ふ聞一こともなくはらう
さくをドめてまへ一葉の黒きとハひらふる因
縁たりやと人あむむひとく心を悩ませ一かど
もふ不親の欲目ふて眉毛ハ鬼もろく葉ハちく

替るそにあらむ人ふとふなることなると
七八才のあらむをだくろげ初生葉ものこふ
むぬけかちり一ふ兩親の案ふ相違一二度目の
齒ハもくく黒くして墨の如くふる一の如く
光陰矢よりもちやくもや十四才の春ふ至り初
花のつがもちらうも時節たちねふるまひい
とやさしくあらまゆもろくはらうその娘
盛りあまどもたごいふ小せん齒と眉毛とあり
近鬼の人々も今ハあま見のが一ふせむ竊ふ

指さし一尊して文盲連の口々小彼の娘の眉毛ハ
いづき小も癩病の筋小相違も何るよ一憐むべ
一玉の顔色も近き内ニ形を失も人其癩病ハ兎
も角も彼の齒の色も怪むべきあり何の家小ハ
いかなる前世の宿業何る斯る希代のおここと
ものを生も一や親ハ代々たどん商賣くろひた
どんを高く賣も去ろ以飯を喰ひ一報くさなく
バコ小又説何何の親達ハかひも去あきと
も近處の人が借金の断も不行き一それソも

ふくきつと一白い齒を見せたることなり其
因果あけ黒い齒の娘を生も一あ人なとて
であふだふ小嘲り笑ふも何又洋學先生の説
小眉毛の麗も一く一て齒の白きハ婦人の面色
を飾るため造物主の特小意を用ひ一ものあり
殊小眉毛ハ面の飾のそなへ光線の過劇を防
ぐための要具あり人小眉毛なれときハ太陽の
光線を上より直小目小受け眼病の原因とある
こと多一故小世界中ニ熱帯諸國日光の劇一き

上地の人ハ眉毛濃く寒帯小近き地の住人ハ眉
毛薄しかくて造物主の深き趣意ハ眉毛不
小生さふが其痕跡もなれとハ天小見放さ
きたる罪人といふべしと親達ハこの説を聞
ふつけても一段のかあしそを増し玉とも花
もたしへん方なり唯ひとり娘もや年頃小
及びたるふこの風情ふてハそても縁談の出来
べき小も何とて医師を頼と神佛を祈とこの娘
の齒を白くし眉毛をそやを法も何とて我身代

をつぶせハあろり両親の命も替へても憚るこ
となしそて手を盡し術を極きとも更小其甲斐
何とあとなし
かくて年月を経る小徒ひ不思議なるく世上
ふて此かたを娘の評判次第小うまき二十才
むありの年小至りしバ近處小くも全く忘
たるが如く一人とく噂する者もなれ也
親も心の中小悦び然るべき算を求てこそ小家
を譲り其身ハ隠居しける小彼のかたは娘

者今ハ申分たれた一家の細君と有り年来の心配
も消て跡ふかき一とぞ嗚呼このむをぬハ不幸
ホして幸を得たものといふべし外國ふて斯
る不具小生をつまふ生涯身の片付も出来ぬ
苦ふる小幸ふして日本國小生を同類のかたを
多けきバシヤ人たも小一家の細君とも有りし
ことなき此婦人不具ありといくど也既小人の
妻と有り上ハその娘の時の由来を知るもの出
そこれを不具なりといふらん知らむしてさうは

見逃ハ鄰の細君が肩をもちひかをもろをつけ
たる風小少しも異なりふし唯ふりやの細君ハ
刺刀を以て肩の色を赤くふしの粉を用てかた
をろをつけ錢を費し手間をかけりんやふる
顔小疵を削て漸くかさこふたりと此娘ハ
生まつきつらつへのかたをづつふと刺刀を用
ひておろろを求めやと世間のかさこ
小仲間入して錢も手間も費さざりしとの相違
ろのゝ実小不思議ふるハ世間の婦人たり髪

を飾り衣裳を装ひ甚だしき借著せしむ
ゑを作さず天然小具もりたる飾をばか
げも無く打捨てかたし者の真似をみるとハ巧
中勤年たれことあらずやほして身体髪膚ハ
天小受けたるものあり慢ふこれ小疵付るハ天
の罪人ともいふべきなり

終